

MG 「基督教の基礎A・B」の履修について

みなさんが明治学院大学に入学されると、全学必修科目として、「C1011基督教の基礎A」（春学期）と、「C1012基督教の基礎B」（秋学期）という「基督教教学」の基礎科目を学ぶことになります。以下、「基督教の基礎A・B」を中心に、明治学院大学の「基督教教学」科目について紹介し、また、その履修方法について説明します。

1. 大学の「基督教教学」は伝道や布教が目的ではありません

基督教系の学校に学んだみなさんは、「聖書」の時間や、礼拝などを通して基督教について学んできていますから、基督教の授業に対する抵抗感はありません。しかし、国公立の学校や、基督教系以外の私立学校出身者のみなさんの中には、基督教に限らず、宗教の授業は初めて、という人も多いと思います。多少不安に思っているという人もいるかもしれません。

大学で教授する「基督教教学」の授業というのは、みなさんをクリスチャンにするために伝道したり、布教することを第一の目的としているわけではありません。大学で大事なものは、どの人にも共通する普遍的な理性の働きと、批判的な精神の活動です。わたしたちは、基督教の授業においても、それらが最大限に尊重されなければならないと考えています。広い視野を持った、オープンな真理探求の姿勢を大事にしたいと思います。

ちなみに、現在、世界の基督教人口は、全人口約71億人の33%、23億人を超えています。世界の3人に1人がクリスチャンということになります。ユダヤ教とイスラームを合わせた「一神教」の割合は、世界の人口の半数を超えます。日本の中にいるとなかなか実感できませんが、過去から現在まで、世界で基督教が果たしてきた、そして、いまでも果たしている役割は、プラス面もマイナス面も含めて、この人口比を遙かに上回るものがあると言っていいでしょう。よいことであれ悪いことであれ、基督教についての知識なしに世界を理解することは不可能であると言えます。

しかし、単なる過去の歴史としての基督教ではなく、現在も生きている宗教としての基督教について学ぶことのできる大学は、決して多くありません。明治学院大学はその数少ない大学の一つです。明治学院大学に入学されたみなさんは、この貴重なチャンスを是非活かして、基督教教科目に積極的に取り組んでみてください。

2. 「基督教の基礎A・B」はなぜ必修なのですか？

わたしたちはこの問いをよく聞かれます。ここでは主な理由のうち三つだけを挙げておきましょう。

一つは、「基督教に基づく人格教育」を行うことが明治学院のそもそもの建学の目的であり、それがすべての基盤となることです。「基督教の基礎A・B」という科目は、この「基督教に基づく」の「基督教」とは何かを批判的に検証し、教授する、いわば明治学院大学の最も根底をなす科目です。自分の大学がどこに立っているか、どのような理想を持ち、どう歩んできたのか。その根底をなす基督教の精神とは何かを、本学の入学者には、全員に等しく知ってもらいたい。これがこの科目を必修とす



白金チャペル

る第一の理由です。

明治学院大学は、ヘボン博士をはじめ、幕末から明治時代にかけて来日した多くの宣教師たちの熱心な祈りと、努力によってその礎が作られました。宣教師たちは、日本人と日本の将来のために、キリスト教の精神を根本に据えた高等教育機関で、神に仕え、人と世界に貢献できる人間を育ててゆくことが重要であると考えたのです。一人でも学生がいれば、その一人が人として育つために、彼らは時間と労力を惜しみませんでした。

この建学の精神は、明治学院創立以来、今日まで一貫して保たれてきた本学の良き伝統です。大学の姿は時代の変化と必要に応じて変わります。しかし、大学には一貫して変わらないものがあります。その変わらないもののひとつが、建学の理念であるキリスト教です。

その伝統と歴史をみなさん全員に受け継いでいってもらいたいとわたしたちは願っています。

二つ目の理由は、大学における学問の営み自体が、そもそもキリスト教との深い関わりを根底に持っていることです。それが西洋起源の学問である場合には特にそう言えます。各専門分野の成り立ちや関心、発想の仕方、モチーフを根底まで掘り下げていくと、わたしたちは各学問の共通の基盤となっているキリスト教と出会います。どの学問分野であれ、自分の分野がキリスト教とどのような関わりがあるかを明らかにすることは、それ自体がキリスト教主義大学の重要な知的課題でもあります。

三つ目の理由は、キリスト教の教える真理が、人が人として生きてゆく上で決定的に重要であることです。人間は知的な生き物ですから、自分を取り巻く環境世界を知り、それを造り変えてゆきます。大学は、そのために知識、情報、知恵を蓄積し、探求します。知識も、情報も、知恵も力となり、人間と社会、自然環境に多大な影響を与えてゆきます。

しかし、例えば、人間による自然環境の破壊は、現在、取り返しがつかないところまで来てしまいました。わたしたちは、わたしたち自身が獲得し、行使する知識や、情報、知恵に対して、それが本当に人間を幸福にするものなのかどうかという区別がなかなかつきません。しかし、わたしたちは、「それには本当に隣人に対する愛があるか」という問いをクロスさせてみると、はじめてその知識、情報、知恵が人を活かすものなのか、そうでないかが、おぼろげながらわかってくるという経験をします。

人間にとって、根源的な問いを繰り返し新たに問われることは、たいへん重要なのです。たとえば、新約聖書は次のような言葉でわたしたちに問いかけます。

たといわたしが、人々の言葉や天使たちの言葉を語っても、もし愛がなければ、わたしは、やかまし
い鐘やさわがしい鏡鉢にようはちと同じである。たといまた、わたしに預言をする力があり、あらゆる奥義とあらゆる知識とに通じていても、また、山を移すほどの強い信仰があっても、もし愛がなければ、わたしは無に等しい。たといまた、わたしが自分の全財産を人に施しても、また、自分のからだを焼かれるために渡しても、もし愛がなければ、いっさいは無益である。(コリント人への第一の手紙第13章1～3節)

大学は高度に知的な場です。しかし、そこで生み出されるこの世の知識、情報、知恵を相対化できなければ、わたしたちは、自分たちが本当に歩むべき道を見いだすことはできません。しばしば、人は外から呼びかけられて、はじめてわれに返るという経験をします。外からの呼びかけに耳を傾ける契機があるかないかは、大学のような高度に知的な場にとってはきわめて重要なのです。キリスト教はわたしたちにとって、そのような外からの呼びかけと言えるでしょう。

将来どのような学問分野を専攻するにせよ、わたしたちは、まず「キリスト教の基礎A・B」を通して、みなさんにこのような外から自分を相対化するための視点、社会や国家やこの世的で完結するものの見方を超えた、垂直的な視点の重要性を学んでほしいと願っています。これがこの科目を本学が必修としている三つ目の理由です。

3. 「キリスト教の基礎A・B」について

キリスト教の世界は非常に幅が広く、多様な内容を持っています。「キリスト教の基礎」は、毎年35～40ぐらいのクラスが開講されますが、担当教員は、それぞれ自分の専門分野（旧約聖書学、新約聖書学、教父学、教義学、教会史、キリスト教史、キリスト教倫理、キリスト教福祉、等々）を生かしながら、一年間の講義計画を立てています。各授業の具体的な内容は、シラバスで確かめてください。ここでは手始めにキリスト教を聖書、歴史、思想の三つの観点から簡単に説明しておきましょう。

(A) 聖書

聖書はキリスト教信仰の土台であり、世界を変えた「書物の中の書物」(The Book of Books) であると言われます。世界には約7,000の言語があるといわれていますが、今日聖書は部分訳も含めるとそのうちの3,300もの言語に翻訳されています。

キリスト教が成立した背景には、それ以前の千数百年に亘るイスラエル民族の歴史が存在しました。旧約聖書は、そのイスラエル民族の歴史と信仰の闘いの記録であり、「創世記」から「マラキ書」まで、全39巻の書物から成っています。それらを研究するのが旧約聖書学です。それに対して、27巻から成る新約聖書には、イエス・キリストの生涯を記した福音書と、最初期のキリスト教徒たちの行動の記録、手紙、そして「黙示録」が収められています。これらを扱うのが新約聖書学です。

聖書を重点的に扱うクラスでは、実際に聖書を読み、表現の特質を押さえながら、旧約聖書の世界・新約聖書の世界に直接わけ入って、そこから、旧約時代の人々の歴史と信仰、イエスと新約時代の人々の信仰について、すなわち、キリスト教信仰の基本中の基本について、理解と考察を深めてゆきます。

(B) 歴史

キリスト教は歴史的な宗教であるといわれます。新約聖書以後のキリスト教の歴史は、パレスチナの片田舎から、地中海を取り囲む古代ローマ帝国全体に広がり、中世には西ヨーロッパ、東ヨーロッパ、ロシアへと引き継がれ、16世紀の宗教改革と対抗改革を経て、西欧列国による植民地化政策とともに、中南米、アフリカ、アジアへと世界中に拡大してゆきました。キリスト教は西洋の宗教という先入観が日本では強

く見られますが、クリスチャン人口の多さと活発さから見ると、現代のキリスト教の中心地は、むしろアジア・アフリカ・中南米の方だと言えなくもありません。韓国、フィリピン、インドネシアなどのクリスチャン人口は日本とは比べものにならないくらい大きく、活発です。中国のクリスチャン人口も数千万人の単位で爆発的に伸びています。キリスト教は2000年を超える歴史を、常に時代の“いま”を生きる宗教として歩んできました。歴史にウェイトを置くクラスでは、このようなキリスト教の歴史と、歴史の中に神の働きの真実を見る信仰の在り方とを、各時代の出来事に即しながら振り返り、過去と現在、神と人間との対話を深めてゆきます。

(C) 思想

アウグスティヌスや、トマス・アクィナス、ルター、カルヴァン、ミルトン、キルケゴール、ドストエフスキー、シュライエルマッハー、カール・バルト、ボンヘッファー、キング牧師、内村鑑三、賀川豊彦など、キリスト教の神学者、思想家、社会活動家、文学者、画家、音楽家を挙げれば切りがありません。思想を重点的に扱うクラスでは、彼らの偉大な遺産を通して、神・創造・契約・律法・十字架・復活・福音・救済・終末といった、キリスト教の中心的な教理、神観、人間観、世界観、ものの見方や考え方、そして、それが現代のわたしたちに対して持っている意味を考察してゆきます。現在の緊急課題である、世界的な貧困格差の問題、地域紛争の問題、生殖医療や生命倫理、あるいは環境倫理に対するキリスト教の立場とそれをめぐる議論、キリスト教と社会との関わり、キリスト教と文化との関わりなど、担当教員の専門に即して、多様なトピックが扱われています。信仰を持って生きる人間とその思想について、議論を深めてゆきます。

4. シラバスをよく読んで「キリスト教の基礎A・B」の事前履修申込み手続をおこなってください

(1) 「キリスト教の基礎A・B」は、横浜校地の月曜日から金曜日の1～2時限目に（水曜日は3時限目もあり）、それぞれ内容の異なる授業が、毎時限2～5クラス開講されます。春学期のクラスは事前に指定されていますので、各自どの教員の授業を受講するのか、シラバスを読み確認してください。秋学期の授業の登録方法については入学後に案内します。

(2) 「C1011キリスト教の基礎A」（春学期）と「C1012キリスト教の基礎B」（秋学期）は、形式上、それぞれ2単位の別の科目です。特別な事情がある場合を除いて、学期の途中で他のクラスに変更したり、登録された曜時限と異なるクラスに出席して単位を取得することはできません。



横浜チャペル

5. 「キリスト教の基礎A・B」以外にもキリスト教関連科目がたくさんあります

「キリスト教の基礎A・B」は、明治学院大学の「キリスト教学」の中の、いわば第1ステージに当たる科目です。明治学院共通科目には、第2ステージとして、以下のような科目も用意されています。

■ 「キリスト教の諸相1～8」と宗教史1～8（1、2、5、6は休講）

各地域のキリスト教の歴史や、キリスト教思想、キリスト教文化などをテーマとする授業が展開されます。聖書研究、キリスト教の死生観、キリスト教と西洋文化、ユダヤ教史、東アジアキリスト教史のほか、人権や差別、環境等、現代社会の諸問題をキリスト教の観点から扱う科目も用意されています。

■ 「オルガン実習」

キリスト教の実践的な側面に重点を置いた宗教部提供科目です。キリスト教が生み出した音楽芸術の豊かさを、オルガン実習を通して実践的に学びます。レッスンの詳細については各校地の宗教部事務室までお問い合わせください。

■ 「明治学院研究1～3」

本学キリスト教研究所提供科目です。「明治学院研究1」（明治学院150年史）はチェーン・レクチャー（複数の教授陣による連続講義）で、ヘボン塾開設に始まる明治学院の150年にわたる歴史を、明治、大正から戦時下を経て戦後に至る日本の歴史と重ね合わせながら考察してゆきます。「明治学院研究2」（宣教師と明治学院）では、ヘボンをはじめとする宣教師たちが明学の創設と教育にどのように関わったのかを学ぶことができます。「明治学院研究3」（東アジアから見る明治学院の歩み）、は、東アジア全体の中に明治学院を位置づけ、その歴史を大きな視点で捉えなおそうとする講義です。自分の母校をよく知るためにも、在学中にぜひ履修したい科目の一つです。

これ以外にも、各学部の学科科目の中に「キリスト教と経済」、「英語聖書」、「キリスト教美術」のようなキリスト教関連科目が開講されています。

「キリスト教の基礎A・B」以外の科目はすべて選択科目です。2年次以降も、キリスト教の多様で豊かな世界に対する関心を広げ、自由な選択の中で学びを深めていってほしいと願っています。